

# 仲間との「かかわり」から生まれる楽しい体育授業

～「ならびっこキックベースボール」の授業実践より～

谷口 佳都司

今日、子どもたちを取り巻く生活環境は、利便性の向上や情報化社会の進展などにより、日々大きく変化している。便利で快適な生活ができるようになった反面、体を動かす機会が減少し、体力・運動能力が低下してきている。私たち学校教師は、子どもたちが生涯において運動に親しんでほしいと願いながら、日々体育授業を工夫しながら行っている。運動することによって、健康維持、体力増進はもちろん、運動そのものの楽しさ、さわやかさの体感、自信、可能性の発見、努力することの素晴らしさ、ルールを守ることの大切さ、仲間づくりなど、様々なことを得ることができる。このようなことを子どもたちがしっかりと実感し味わうことができる体育授業作りをめざし、研究を進めてきた。

(キーワード): グループでの活動, かかわり, 課題, めあて, 教師の声かけ

## 1. 研究の目的

### 1. 1. 仲間と共に学ぶことで

個人的スポーツであっても集団的スポーツであっても、一緒に運動する仲間がいることは大きなプラス材料になる。共に喜び合う。励まし合う。教え合う。一緒に練習する。互いにライバルとなる。共に記録に挑戦する。このような仲間との「かかわり」ができれば、子どもたちがもっと意欲的に運動できると考えた。

そこで、今年度の個人研究テーマを『仲間との「かかわり」から生まれる楽しさ』として体育授業づくりの研究を進めてきた。

### 1. 2. 運動に慣れ親しむ子どもをめざして

子どもたちに今までに経験のない運動をさせた時、その運動に慣れ親しみ、その運動が好きになってほしいと願う。そこで、体育授業では、運動が持つ基礎的な感覚や動き、あるいは、運動の学び方を身に付けさせることを特に大事にしながら行う。

走る、跳ぶ、力を出す、バランスをとる、用具を使う等、運動は様々である。初めて行う運動では、簡単なことから複雑なことというように、段階を追って子どもたちに経験させたい。そして、その運動の持つ感覚や動きを身に付けさせたい。

また、グループや一斉での活動を通して、学ぶ姿勢やルール・マナーを理解し、運動の学び方をしっかり身に付けさせたい。そして、子どもたち一人ひとりの自主性、創造性を活かして、自ら課題解決できる力を伸ばしたいと考えた。

## 2. 研究方法

### 2. 1. 仲間との「かかわり」を深めるために

仲間との「かかわり」を深めるために、子ども同士

の積極的な対話が行われる体育授業をめざしたい。そこで、以下のような手立てを考えた。

- ・一斉学習で、「運動の方法」「学習のルール」「学習の進め方」の確認、全体の共通課題の設定、発見したことの交流、仲間の頑張りを賞賛、学習の振り返り等をさせる。(図1)



図1 一斉学習の一場面

- ・個人的スポーツにも、グループでの活動を多く取り入れ、他者の視点で見ることや他者の考えを理解する機会を作る。
- ・子どもが親しみやすく取り組みやすい技能獲得の場を設定し、動きの工夫や作戦を考えさせる。
- ・個々の学習カードに、その時の学習で気付いたことや思ったこと等を具体的に記入させる。

### 2. 2. 『ならびっこキックベースボール』

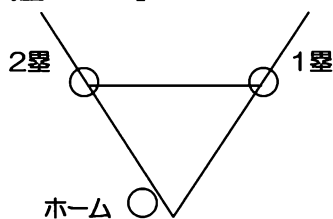
#### から学ばせたいこと

キックベースボールは、ボールの蹴り方、捕り方、走り方などの基本的な技能を高めることが可能な運動である。また、2チームが攻めと守りに分かれ、攻めのチームはボールを蹴って進塁し、守りのチームは進塁を防ぎ、得点の競い合いを楽しむことができる。さ

らに、集団対集団で競い合うことを通して、仲間と協力してゲームを楽しむ運動である。

今回のキックベースボールについては、守りの時、ボールをキャッチした子の後ろに、チームのメンバー全員が走って集まり、前の子の肩を持って素早く列を作って座り、「アウト！」とかけ声を出す方法にした。また、攻めについては、チームのメンバー全員が一回ずつ蹴り終わったら攻守交替をし、残塁もせずベンチに戻るようにした。このようなやり方でゲームを行い、相手チームをできるだけ早くアウトにするためにはどうすれば良いのか、あるいは、どの方向にどのような蹴り方をすればたくさん得点できるのか等を考え、チームの作戦を立てていくことを楽しむ学習をめざし、この単元を構成した。

#### 【三角型のコート】



#### 【主なルール】(クラスの実態に応じて変更・追加。)

- ・1チーム7～8人 4チーム
- ・何点取ることができるかをめざす。
- ・バッターは思い切りボールを蹴る。1塁ベースに向かって走る。次に2塁、ホームベースへと走る。
- ・1つのベースを踏むたびに1点。2周目に入っても良い。「アウト！」とコールされるまで走ることができる。攻撃は一巡したら交代する。
- ・守備側は、1人がボールをキャッチしたら地面から持ち上げる。その人を先頭にし、自分の前の人の肩に手を置きながら電車つながりになる。揃ったら「アウト！」と声を出して座る。
- ・守備側がノーバウンドでキャッチしたらアウト。

### 3. 授業の実際

#### 3. 1. 単元

第2学年「ならびっこキックベースボール」

#### 3. 2. 単元計画 (全7時間)

- オリエンテーション (45分×1時間)
- ねらい1…蹴る、捕る、走るなどの基本動作に慣れながら、ゲームを楽しむ。(45分×2時間)
- ねらい2…チームで練習や作戦を工夫し、ゲームを楽しむ。(45分×3時間+35分×1時間)
- まとめ (10分×1時間)

#### 3. 3. 単元目標

仲間と一緒に、作戦や動きを工夫しながらキックベースボールを楽しんで行うことができる。

#### 【関心・意欲・態度】

○順番やルールを守り、互いに協力し合い励まし合いながら楽しくゲームをすることができる。

#### 【思考・判断】

○ゲームがより楽しくなるために、ルールや作戦を考え、工夫することができる。

#### 【技能】

○止まったボールをねらった方向に力いっぱい蹴ったり、向かってくるボールを上手に受け止めたりして、楽しくゲームができる。

### 3. 4. 自己の課題解決が成されるために

子どもたちの運動に親しむ姿勢を育てるためには、運動そのものの魅力、あるいは、仲間と一緒に競争したり協力したりしながら運動する楽しさなどを味わうことが大切だと考えた。

本単元については、各チームのグループでの活動を柱とした学習形態にした。仲間と一緒に練習したり作戦を考えたり励まし合ったりしながら楽しく学習することが大切だと考えたからだ。そして、仲間同士のかかわりが有効に作用すれば、質の高い学びとなり、より大きな習得や変容が生まれることが期待されると考えた。

チームの学習のめあてについては、「どうすれば上手く守ることができるのかを考える」「どうすれば全員が得点できるのかを考える」というように、その時に一番強く感じている思いを込めためあてを設定させ、具体的な手立てをいくつか考えさせた。そして、児童一人ひとりの課題を明確に持たせ、チームのめあてに向かい、チームのメンバーが一丸となって課題解決に取り組むようにさせた。

また、一斉学習では、ボールの蹴り方や受け止め方・守備の立つ位置・走り方が上手な子やチームのこと、発見した動きのコツ・頑張って取り組む子の様子等について意見交流させ、学級全体の中で伝え合い話し合う場になるようにした。困ったことや上手いかわないことについても意見を出させるようにし、みんなで改善する方法を考え、どのチームも楽しんでキックベースボールのゲームを行うことができるようにした。

### 3. 5. 学習の様子

#### (第1時の学習〈オリエンテーション〉)

オリエンテーションを行い、これからの学習について見通しを持つため、アンケート調査を実施した。体育が好きという子が29人中23人であり、ボール遊びに比べ、ボール蹴り遊びについてはやや抵抗を感じている子がいることがわかった。いくつかの嫌いな理由の中に、自分がボール蹴りのゲームや遊びに十分参加できていなかったこと、ルールが守られなかったことという意見が挙げられた。また、クラスの大半の子がキックベースボールを知らず、実際に経験のある子は

6人であった。

以上のことから、この単元を進めていくにあたり、キックベースボールの基本的なやり方を覚えるため、簡単なルールでゲームを行った。慣れたら、自分たちに合うルールの付け加えや変更をすることにした。

キックベースボールのゲームの基本的な進め方について教師の方から子どもたちに教えた。特に、攻め・守り・走塁の3つのやり方、コート、点数の付け方、チームノート・個人学習カードの記入の仕方などについて話し、次時の学習から実際に行っていくゲームのことを理解させた。また、グルーピングについては、日頃サッカーなどをよくしている子もいるが、その子たちを振り分ける必要はないという意見が多数だったため、男女の人数が同じ割合になることだけを配慮して決定した。

### (第3時の学習)

【子どもの個人学習カードより】(図2)

【今日の学習はどうだったか】

- ・20点以上取ることができて嬉しかった。
- ・蹴るのが面白かった。
- ・みんなの目標は25点だったけど31点取れて嬉しかった。

【困ったことはどんなことか?】

- ・ルールを守っていない人がいた。 ・蹴りが弱い人がいた。
- ・守りで地面にボールをつけたこと。
- ・点数をつける時、ややこしかった。
- ・間違っ隣のコートのベースを回っていた。
- ・他のチームに遠くまで蹴られて悔しかった。
- ・1人遅れて、2点取られそうになった。
- ・「せーの、アウト。」と言う時に一人離れていた。
- ・練習の時、ちゃんとできてなかった。



図2 個人学習カードの記入(ゲーム終了後)

チームのめあてと個人のめあてを決めたうえで、ゲームに挑ませた。子どものお大半は、たくさん得点できることを一番のめあてとしてプレーしていた。2回表・裏のゲームを行うことができた。また、風が強く吹いても点数がめくられてしまわない得点板を使用したことや一人ひとりの得点の記録をさせたこともあり、スムーズにゲームが流れていった。色んな役割や活動が増えてきたために、困ったこともたくさん出てきた。しかし、それを改善していくことで、更に発展した学びや温かい雰囲気ができると考え、次時からの学習に

活かしていきたいと考えた。

### (第6時の学習)

攻め方・守り方について各チームに工夫が多く見られた。攻め方については、相手チームの子が居ないところを狙って蹴ったりわざと短く蹴ったりして、何とか出塁しようとしていた。守り方については、外野を守る子を増やしたり、横一列に分散して守ったりするなど、相手チームの蹴り方に合わせた守備隊形にしていた。ゲーム前半の経験を、ゲーム後半で活かしているチームがあり、具体的な内容の作戦が立てられていた。(図3)

前々時までは、蹴り方の工夫で得点アップして勝ちにつなぐめあてや作戦が多かった。しかし、前時・本時では、守りの工夫に重点を置き、相手チームから得点されないためのめあてや作戦を考えてゲームを行っている様子が伺えた。



図3 作戦タイム

【守りに関するめあてや作戦(第5時・第6時)】

【チーム】

- ◎すぐに並べるようにする。 ◎遅れないようにする。
- ◎守りを頑張る。 ◎走って守る。

【個人】

- ・早くボールを取りに行く。 ・ちゃんと散らばる。
- ・誰かが受けたらそのすぐ後ろに並ぶ。
- ・早くみんなのところに行って並ぶ。 ・かたまらない。
- ・遠くに蹴られたりするボールも受けれるように。
- ・頑張って全力で走ってボールを取りに行く。
- ・前と後ろの両方を守る。 ・かいっぱい守る。

微妙なファール、ベースを踏んだタイミングがセーフかアウトかの判定については、子ども同士で相互審判するのはなかなか難しく、対戦チームともめ事になったり教師に相談したりすることが多かった。

## 4. 授業の考察

この単元を終了してから、子どもたちにアンケートを取った。「キックベースボールは好きですか?」の質問に、29人中、「◎楽しい」と答えた子は25人、「○普通」と答えた子は4人であった。

子どもたちの学習状況を振り返ってみると、精一杯ボールを蹴り、塁間を走り、ボールをキャッチしていて、大半の子が意欲的にプレーしていたと感じた。この単元に入ってしばらくの頃は、一人ひとりがしっか

り動くことが大事だという意識があったが、後半になって、チームのメンバーが力を合わせて動くことも大事だと気付いてきていた。

様々なキックベースボールのルールがあると思うが、体育の授業として扱うのであれば、やはり今回のように「ならびっこ」の守り方を取り入れる方が良いと感じた。一人ひとりの運動量を十分確保でき、また、一つのボールをみんなでアウトにするということでチーム作りにもつながり非常に有効だと考える。(図4)



図4 一列に並び、アウトをとる子どもたち

また、自己の変容へとつなく吟味ができるように、チームのめあてに沿って個々の具体的なめあてを考えさせてきた。その効果もあって、半数くらいの子もたちがその時間に何ができるようになりたいか課題意識を持って取り組んでいたようであった。そして、チームが勝つために作戦を成功させることや自分の技能を上達させることをめざしていた。教師も一人ひとりのめあてを把握した上で、適宜言葉かけすることができた。しかし、あとの半数の子もたちの中には、「(自分が)5点以上取るように頑張る」「1周回れるように遠くに飛ばす」のように、個々のめあてが点数を取ることのみに偏っている子が何人もいた。

## 5. 研究の成果と今後の課題

本単元の学習を通じて、互いの頑張りを認め合う雰囲気、助け合い協力し合う雰囲気作りをめざしてきた。その手立てとして、毎時間、一斉に集まる場で「今日のファインプレー賞」の友だちや、困ったことや改善したいことを発表させることを繰り返してきた。その積み重ねによって、子どもたちの学習意欲をよりいっそう高めることができたのが大きな成果であった。

自分の頑張りをみんなに知ってもらえることは、自信や励みになったようであった。そして、自分のチームだけでなく、対戦チームの子にもファインプレー賞をあげている子がいて、ゲームの勝ち負けに関係なく、自分のプレーを見てくれているという子ども同士の信頼関係も深められた。また、困ったことや改善したいことを素直に全体の場に出し合うようにしたことによって、みんなで正しい判断をしたり解決方法を真剣に考えたりする姿勢を身に付けることができ、良かったと感じている。

しかし、いくつかの今後の課題もあった。特に次の2つについては、ボールを使ったゲームを進めていく

上で特に気を付けていきたいと考える。

1つは、学習の初めの各チームでの練習である。どんな作戦にするのか話し合うことや、ゲーム中にどんなことに気を付けてプレーするかについては、子どもたちは意識して行っていたと考える。しかし、各チームでの練習の時に、どんなことが上手になるために練習するのか、どんな方法で練習するのかをきちんと決めないで行っていたチームが多かった。ボールを強く蹴ることができない子、ボールをしっかり捕ることができない子は、いつまでも技能を習得できていなかった。ゲームをただで技能はなかなか上達しないので、短時間で効率よくできるように、各チームで事前にしっかり練習内容を決め、何らかの工夫をして集中して行うことが必要だと考える。

もう1つは、ゲーム中の教師の子どもたちへの関わり方である。前述のように、ゲームを行っている時、微妙な判定をしなければならぬことがあり、何度かゲームが中断してしまう。特に今回は2コートで行っていたので、一方のコートの方でややこしい判定があり、教師がそちらのコートへ行ってしまうと、もう一方のコートの様子が全く分からなくなってしまったこともあった。教師は常に両方のコートを見る位置に立ち、子どもたちが迷った時に的確な判断を示すようにすることが必要だと感じた。そして、個人的に、あるいは、各チームにアドバイスするのは、なるべく作戦タイム中にしていく。どうしてもゲーム中に必要であれば、できるだけ短い言葉で少しの時間で行うようにしていきたい。(図5)



図5 作戦タイム中の教師の声かけ

更に、子どもたちの変容がもっと見られる学習にしていくには、めあてをもっと焦点化できるような教師の言葉かけや働きかけの工夫が必要である。子どもたちの視点のめたせ方や意識付けを明確にし、吟味のある学習をめざして、今後も体育授業の研究を続けていきたい。

参考文献：

- (1) 渡邊 彰・今関 豊一 編著 2009年  
「平成20年改訂 小学校教育課程講座 体育」 ぎょうせい
- (2) 中村敏雄 著 1998年  
「体育のグループ学習」 創文企画